

Title	Germania-Romana (3) : ゲルマン語のローマ、ケルトとの接触
Author(s)	河崎, 靖
Citation	ドイツ文学研究 (2002), 47: 1-18
Issue Date	2002-03-29
URL	http://hdl.handle.net/2433/185454
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

Germania-Romana

(3)

ゲルマン語のローマ、ケルトとの接触、

河 崎 靖

目次

序. 国家を越えた方言としてのオランダ語

1. ゲルマンとラテンの間で

-低地諸国(オランダ、ベルギー)の言語事情-

1-1. ゲルマン語内でのオランダ語の位置付け

1-2. ベルギーの言語事情

<以上、前々回>

2. 「ゲルマン vs. ローマ vs. ケルト」という図式

2-1. ゲルマンとローマの境界線の成立

2-2. オランダ語の史的発達

<以上、前回>

3. ゲルマン語のローマ、ケルトとの接触

<今回>

3-1. ベルギーの言語境界線

3-2. 新たなる地名学の可能性

3 ゲルマン語のローマ、ケルトとの接触

カール大帝の時代、一般にライン川とロワール川の間の地域はフランキアと呼ばれていた(次図参照)。そして、この地方のまさに真っ直中をゲルマン語とロマンス語の言語境界線が走っていた。フランキアはフランク王国の中核をなし、そこには重要な王宮・王領地・修道院が集中していた。今日のベルギーの言語状況(北にオランダ語圏、南にフランス語圏)を引

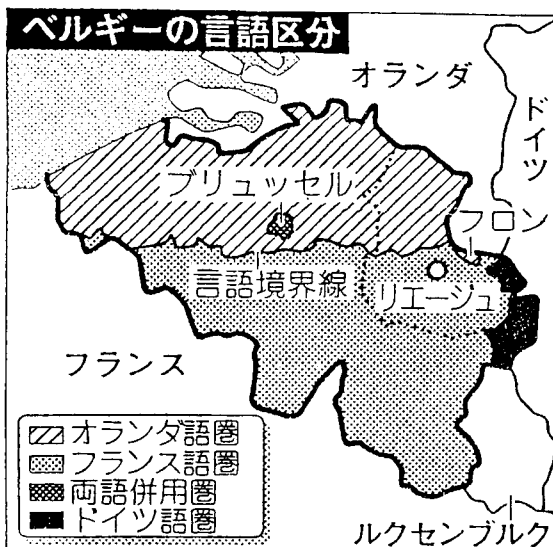
き起こす要因はすでにこの当時からあったことがわかる。



カール大帝時代のフランク王国

3-1. ベルギーの言語境界線

ベルギーのジレンマは、ほんの150年ほど前に作られた国であるにもかかわらず、1000年以上に渡って続いている言語境界線によって分割されているということである。北のオランダ、南のフランスの間で、フランドレン・ワロン の両地域が実際に統一された状態にあるというわけではなく、そうかと言って、互いに独立している状況にあるわけでもない。国家が、フランドレン・ワロン・ブリュッセルの3つの分割地域と、オランダ語・フランス語・ドイツ語の3つの言語を認める形での連邦制という方針(1993年以来)がとられている²⁾。



上図のような言語事情を理解するためには、ライン河畔一帯における中世初期以降の歴史のプロセスを語ることから始める必要がある。

西暦800年、神によって戴冠。ヨーロッパ統合の先駆的形態としてのカール大帝の帝国。現在、統合へと向かうヨーロッパの原風景とも言える。カール大帝こそは、ラテン的キリスト教世界としての(西)ヨーロッパの政治的統合を初めてほぼ完全な形で実現し、その後のヨーロッパ統合の可能性の拠り所となった人物であり、また、ローマから受け継いだ帝国理念を後代のヨーロッパに伝えた人物であった。前近代の大きな王国は一般に、地域ごとの言語・民族・文化の違いを尊重することによりはじめて成り立ったものであり、今日的な意味での中央集権的な国家とは全く異なる性格をもっている。このことは当時の言語(あるいは法律)の状況を見れば明らかであり、その多様性は今日のヨーロッパまで受け継がれている³⁾。さて、ドイツの北からローマ、ピレネーに広がる統一ヨーロッパを完成させ、い

わばラテンの知を広めキリスト教を浸透させ神の帝国を築いた大帝カールの死後、フランク王国は三分割され、彼の子ルートヴィッヒの息子たちに分け与えられることとなった。この3つの部分とは、カール2世の治める西のフランス、ルートヴィッヒ2世の統治する東のドイツ、ロタールの支配するいわゆる中フランク王国である。このうち三番目の王国は南北に細長く、北はオランダに始まり、ルクセンブルク、アルザス・ロレーヌ、ブルゴーニュを経て北イタリアに及ぶ領土であった。10世紀には、ドイツが、オランダ語・フランス語が使われていた低地地方を併合し神聖ローマ帝国となり、一方、フランスが、スハルト川からノルマンディーにまで広がるフランドル地方の残りの部分を併合することにより、三分割の状態は大きく二つの部分となる。その結果、低地地方では、オランダ語話者も、そしてフランス語話者も分かれたることになった。とりわけフランドルはオランダ語とフランス語がぶつかり合う地域となり、今日の言語紛争の予兆めいたものがこの時すでに見られると言ってもいいであろう⁴⁾。

フランク人がヨーロッパ史にとって関心の対象になったのは、メロヴィング朝以来（すなわち、ローマ人がゲルマニアから撤退し、5世紀にそのピークを迎える大移動の後）のことである。歴史学の伝統では、フランク族はサリ系フランク族とリプアリ系フランク族とに分けられる⁵⁾。この区別はまず8世紀の文献資料の中でなされており、サリ系を海岸地帯のフランク族としている（sali=「塩」、したがってオランダの南部あたりを占領した民族）。一方、リプアリという語の語源ははっきりしないが（おそらくripa=「ライン川の堤防」）、とにかくライン川沿いの内陸のフランク族のことを指している。4、5世紀のガリア侵入の際、先頭に立ち指導的立場をとったのはいわゆるサリ系フランク族である。彼らはローマ人に隣接して長い間暮らしてきており、これに対し、リプアリ族はいつもローマに敵対してきた。当時、フランク人に統一政権が長らく存在せず、いくつもの独立した

政治単位に分かれていたことはほぼ確からしい。それゆえに、フランク人について語る史料をよく検討してみると、フランク人像はそれほど単純で画一的な自明性をもつものではない⁶⁾。ここでは以下、学説史的な研究動向も踏まえて、移動期におけるフランク族の実態を探り、このことを通じてライン川とロワール川の間に定住したフランク人の実像に光を当ててみたい。

フランク王国の社会構造の中で、フランク人の貴族はロマンス人の地主階級と共に支配層を形成し、残りのフランク人の農民やロマンス人の納貢者は自由民層に属し、また、一般のロマンス人はこの両層に農奴として従属していた。この共存における言語接触は、その人口比率に応じた結果をもたらした。フランク王国の北部（ベルギー北部・フランス北部を含む）ではロマンス人の人口比率がもともと低く、フランク人が人口の大半を占めていた。逆に、フランク王国の南部ではフランク人がもっぱら少数派であった。また、フランス北部・ベルギー中部には両民族の人口比率が比較的均等である地域が存在していた。Gysseling(1960)は地名学の研究を進める中、8世紀の手稿本の中に Hlopanna・Flawinne という二重語が存在することを明らかにした。これは同一の地名を指すのに、ゲルマン語およびロマンス語の両語でそれぞれ異なる地名が存在していたことを意味する。この手稿本に記載されている二重語が例外なのではなく、メロヴィング朝時代にゲルマン人・ロマンス人が共存していた各地域に同じような二重語が数多く存在していたのではないかと M. Gysseling は考えた。調査の結果、二重語には、共通の原形から両言語においてその言語特有の音声的变化を受けて発展したタイプと、一方の言語にすでに存在していた語が他方の言語に翻訳移入あるいは音声的变化を経るタイプの二種類があることを Gysseling は確認した。二重語が存在していた地域において一つの言語が使用されなくなると、その言語の地名も消え、勝ち残った言語の地名だけし

が残らなかった。そのため、他方の言語地域でも広く知られていた二重語（例えば大都市名）のみが現存し続けることができた。今日まで残る代表的な二重語を以下にフランス語・オランダ語の順で挙げる。

Arras=Atrecht, Tournai=Doornik, Courtrai=Kortrijk,
 Cambrai=Kamerijk, Malines=Mechelen, Louvain=Leuven,
 Namur=Namen, Bruxelles=Brussel, Anvers=Antwerpen,
 Bruges=Brugge, Liège=Luik=Lüttich, Cologne=Keulen=Köln⁷⁾

フランク人とロマンス人との共存生活は、相手の言語を受動的に知る段階から両言語に主体的に接するというプロセス、そして先祖の言語に関する情報を得るという過程を経て、一言語使用に至る。ガリアの北部（ベルギー北部を含む）・東北辺境地（現在のドイツ西南部の一部）における使用語はゲルマン語へと、その他の地方はロマンス語へと発展した。こうして、次第に言語境界「地帯」が形成されていくことになる。

こうしたプロセスは地名の音声的变化に表われる。例えば、二言語地域の北部におけるロマンス語地名の接尾辞 *-(in) iacas* がゲルマン語の音声的变化を受けて *-(en) aken* へ発展したこと（例えば東フランドル州 Rozenaken）は、この地域においてゲルマン語のみが使用されて発展したことを示す。また、同地域でゲルマン語地名の接尾辞 *-baki* は8世紀にゲルマン語の音声変化を受け、*-beke*（例えばフランス北部の Herbecque）となる。一方、南部ではこの接尾辞 *-baki* はロマンス語の歯擦音化によって *-baix* や *-bise*（例えばフランス北部の Roubaix）へと変化する。この音声変化がみられる地域ではロマンス語が統一言語となっている。このような二重語の消滅や北部における地名のゲルマン(語)化、南部における地名のロマンス(語)化は、言語境界「地帯」が7-8世紀に次第に言語境界「線」へ

と変わり始めたことを示している。

言語境界線の成立の原因についてはさまざまな学説が出されてきた。しかしながら、少なくともここで明らかにしたいポイントは次の点である。言語境界線は、フランク人の移住を停止させた「線」ではなく、フランク人の移住・浸透によってできた二言語混合地域が少しずつ二つの一言語地域へと発展していく過程でできた「線」であるということである。二言語混合地域の南部では、フランク人が支配層として定住し、フランク語がロマンス語に影響を与えたとは言え、この支配層がもっぱら少数派であったため、ロマンス人はフランク語を使用言語として受容するには至らなかった。逆に、クローヴィスやフランク人貴族たちはキリスト教への改宗・パリへの王宮移転によってロマンス文化と共にロマンス語を受容するようになった。北部は、ローマ時代におけるバヴェ(Bavay)・ケルン(Köln)の防衛線建設によってロマンス文化の影響が届かない無人地帯となっていた。フランク人はドールニックを拠点としてこの地域を植民した。この地域ではフランク人が人口の大多数を占め、ロマンス語を受容したフランク人貴族が滞在していたパリから距離的にも離れていたため、この地域のフランク人は独自の言語を保つことができた。言語境界「地帯」が言語境界「線」へと集約されていく際、パリの影響下にありロマンス人の人口密度が高い地域ではロマンス語が統一言語となり、逆にパリから離れフランク人が大多数を占めた地域ではフランク語が統一言語となった。そのプロセスを地域ごとにまとめるならば、言語境界「地帯」の西部(フランス北部)ではロマンス(語)化が顕著であるが、中部(ベルギー中部)ではその北側にゲルマン(語)化、南側ではロマンス(語)化の軌跡がほぼ均等に見られ、また、東部(ベルギー東部・ドイツ西南部)ではゲルマン(語)化の軌跡の方がより多く確認されるということになる。

3-2. 新たなる地名学の可能性

Die Ortsnamen (Siedlungsnamen, Flußnamen, Gebirgsnamen usw.) gehören z. T. zu den ältesten sprachlichen Zeugnissen.

[...] Es ist ja gewiß, daß die Hydronymie das älteste europäische Sprachmaterial überhaupt überliefert, und es ist in der Tat jede wissenschaftliche Mühe wert, diese Überlieferung sprachhistorisch und darüberhinaus allgemeinesgeschichtlich auszuwerten.⁸⁾

「ローマとガリアの関係はカエサルより三百年も前から始まる」(『ガリア戦記』4頁)とあるように、地名学(Toponymie)を通してゲルマンの歴史を掘り起こす場合でも、「ゲルマンvs.ローマvs.ケルト」という三者の関係図において捉える必要がある。その意味で本章でも、低地地方のゲルマン語(化)の歴史を辿ることを主眼とはするが、ロマンス語との影響関係、ケルト学(Keltologie)の研究成果をも十分に加味して考察を行いたい。

カエサルによるベルギー征服後、ローマ人はベルギー地方をガリア・ベルギカ(Gallia Belgica)と名づけ、いくつかのキウィタス(civitas「地区」)に区画し、ローマ帝国の行政制度を導入し、ケンスス(census)という租税制度を確立した。さらに、ローマ人は北ガリアの反乱阻止およびブリタニア・ゲルマニアの侵略という二つの目的をもって、リヨン(Lyon)を起点とする道路網を建設した。この道路網はその目的に従って、北海およびライン川地域に向けられた。ライン川地域に向かう道路の一つ、バヴェ(Bavay)からケルン(Köln)に至る軍道はベルギーのちょうど真中を通っていた。ローマ人は軍道に沿っていくつかの要塞を建設した。例えばバヴェ・ケルンの軍道上に位置している都市トンヘレン(Tongeren)で発掘された1世紀前半に遡る倉庫や堀・兵舎の存在は、この都市がローマ軍の要塞

であったことを示している。47年には、ローマ人はゲルマニア侵略政策を放棄し、ライン川に沿って要塞を連ねた防衛線を組織した。このため、後背地であったベルギーはローマ防衛軍のための物資供給地域として重要となった。ローマ軍の駐留および軍への物資供給のために入植したローマの植民地開拓者の居住によって、ベルギーにおけるロマンス化はガリアの中心部よりも早く進んだと思われる。要塞の他に、ローマの特徴をもつ神殿・建物・道具・芸術品等がベルギーで数多く発掘されていることは徹底したロマンス化のあったことを示している。

ベルギーのロマンス(語)化を促進した重要な要素はローマの植民地開拓者によるフンドゥス (fundus 「大規模な農場」) の建設であった。ローマ人はベルギーをキウィタスに区画し、さらにキウィタスをパギー (pagi 「村」) に、パギーを租税の基礎単位であったフンドゥスに区分した。フンドゥスは一つの経済単位であり、地主の豪華な屋敷の他に農家・パン屋・醸造所・工房等々を含み、一種のミニチュア社会を形成した。フンドゥスの地主はローマの退役士官などがなっていた。ローマ人の地主の許でローマ帝国の各地域から集まった労働者・奴隷や原住民が農場の仕事に従事し、フンドゥスに定住していた。フンドゥスで共同生活をしていた様々な地域出身の人々は共通言語として地主の言語すなわちラテン語を採用していた。このようにフンドゥスはロマンス(語)化の強い道具となった。各フンドゥスに付けられた名称の典型的な形は、ローマ人がガリアから借用した接尾辞 *-iâcum* を地主の名に付けたものであった。ラテン語人名はその語末が *-ius* で終わるものが多く、この人名の活用語尾 *-us* が脱落し、*-iâcum* が直接 *-i* に続いたので、この *-iâcum* は早い段階に *-iâcum* へと発展した。当時の *-iâcum* 語尾をもつ地名の分布は、各地域におけるフンドゥス建設の密度を示す一つの情報源である。ローマ軍の重要な要塞都市であったバヴェ (Bavay) とトンヘレン (Tongeren) との間を結ぶ軍道に沿って位置する以下

の四つのウィクス(vicus, ベルギーで「小さな町ほど大きなフンドゥス」を指す)は -iâcum 地名の普及の様子を示している。

Waudrez(300年頃初出・8世紀写本に uodgoriacum として記載),
Gembloux(300年頃初出・8世紀写本に geminiacum として記載),
Taviers(1070年写本に thauers として記載、ラテン語の tabernâs より由来), Braives(300年頃初出・8世紀写本に perniciacum として記載)

このようにベルギー地方の真中をはしる軍道上の四つの vicus のうち三つが -iâcum 地名である。-iâcum 地名でない Taviers もやはりラテン語にその語源を求めることができる。しかし、-iâcum 地名が必ずしもローマの軍道に沿ってのみ存在していたというわけではない。現存するローマ帝国の最も古い地図、ターブラ・ペウティンゲリアーナ (Tabula Peutingeriana, 4世紀・13世紀写本ウィーン国立図書館所蔵) におけるガリア・ベルギカの部分を見ると、ベルギー北部にも -iâcum の接尾辞をもつ地名が数多く存在していたことがわかる。ここで見たように、ロマンス語地名の調査はベルギーとりわけ東西両フランドル州やブラーバント州におけるフンドゥス建設を始めとする植民地開拓によるロマンス(語)化を示唆している。しかし、ロマンス語地名の分布状況のみを基に各地域のロマンス(語)化の密度を確定することは難しい。なぜなら、ロマンス語地名の少ない現在のリンブルフ州やアルデンヌ地方でローマの遺跡が数多く発掘されているからである。このように、ローマの統治およびフンドゥスの建設などによって、原住民がロマンス(語)化するという結果に至った。ロマンス(語)化された地域の拡大状況は原地名の e, i, j の前の子音 k の歯擦音化に表われている。すなわちロマンス語の影響によって、子音 k は母音 e, i, j の前で tsj への変化を経て、s へと変化する。ベルギーではこの現象が4世紀に起こっている。ロ

マンズ(語)化された地名はレイエ川(Leie)・スヘルデ川(Schelde)を越えて、ベルギー北部にまで及ぶが、ベルギー北部にはロマンス語とゲルマン語の混合地域が存在する。以下に4世紀のベルギー北部(ブリュッセルBrussel・ルーヴェンLeuven周辺)におけるいくつかの地名を挙げる。

ロマンス語化された地名：*Mainikinas → Mesen, *Auciaco → Ose,

*Mauriciaco → Moerzeke

ゲルマン語のままの地名：*Wakkinion → Wakken, *Kalkinion →

Kalken

北部において地名がゲルマン語のまま残ったことは、この地域におけるロマンス(語)化が完全ではなかったことを示しているが、北部の地名の中にもロマンス(語)化された地名が多いということは、ロマンス(語)化が上流階級だけでなく、下流階級にまで及んでいたことを意味する。これらのことから、4世紀のベルギーにおけるロマンス(語)化は北部にゲルマン語との混合地域を残しつつかなり進んでいたと言える。

ところで、ケルト人の到来以前、ベルギー・オランダ・北西ドイツには特有の基層言語が存在していたと考えられる。インド・ヨーロッパ語の p はゲルマン語では f に、ケルト語では h、後に ø に変化したのに対して、この地域の基層言語は p を保守的に無変化のまま残していた。基層言語に起源をもつ無変化の子音を含む単語は現代オランダ語においても見出すことができる。例えば pink 「小指」は印欧祖語の *penkʷe 「五番目の[指]」にその起源をもっている。ケルト人の到来に伴ってガリアにケルト語の地名が出現するようになる。ローマ時代になると、ケルト語の要素をもつ地名が多く現われる。例えば、*briga(「山」・「要塞」、現代オランダ語で berg), *briva(「橋」、現代オランダ語で brug), *dunon 「城壁」、*duron

(「強さ」>「要塞」), *kondate「合流」, *magos「市場」, *novienton「新しい村」などである。しかし、この時代におけるケルト語の要素をもつ地名の北方境界線は、ベルギー以南すなわちフランス北部のソム川(Somme)からルクセンブルク(Luxembourg)を経てメイン川(Main)まで走り、ベルギー・オランダの地名にはケルト(語)化の形跡が少ない。例えば、ケルト語の*duronboion(ポイ族の要塞)に起源をもつ、ベルギー南部に位置しているDurbuy(13世紀durboiensis)の地名などがそうである。また、ローマ時代に出現するケルト語の地名としてオランダ南部のNijmegen(365年頃・13世紀写本nouiomagi「新市場」)やBatavodurum(107年頃・11世紀写本batauoduri「バタヴィ族の要塞」)を挙げることができる。このように、ケルト語の影響を受けることが少なかったベルギーは紀元前2世紀にゲルマン語の影響を受けている。このベルギーにおけるゲルマン(語)化の時期はゲルマン語における p>f, t>th, k>h という子音推移の最終段階と重なっている。しかし、ベルギーの基層言語地名においては、語中に起こる子音変化が語頭に起こる子音変化に比べてかなり少ない。これは、ゲルマン語における子音変化がこの時期にすでに終局を迎えていたからであると説明する説もあり、また、ゲルマン(語)化が完全ではなかったという解釈もなされている。いずれにせよ、すべての基層言語地名に子音変化が起こっているわけではない⁹⁾。推測されるのは、およそこの時代におけるゲルマン人の侵入者たちは主として河口からベルギーの内陸へ進んだということである。なお、ゲルマン(語)化されず無変化のまま残っている地名の数が多ことは、ゲルマン人の侵入者が原住民と共存したことを示唆している。ここで見たことから「ベルガエ部族の多くはゲルマンの起源をもつ」という『ガリア戦記』における記述は地名学的研究によって裏付けられることになる¹⁰⁾。考古学・文献学・地名学のそれぞれの分野におけるデータには相矛盾する事柄が多いために、カエサルが侵略した時期にベルギーに住ん

でいた部族の起源について確定的な結論を出すことは困難である。これまでこの問題について各分野から多くの異なった見解が出されてきた。以下に、De MulderおよびVan Durmeの学際的な仮説を要約的にまとめると次のようになる¹¹⁾。先史時代に印欧語を話す部族がベルギーに定住した。考古学的データが示すように、紀元前5-4世紀からこの地方はケルト文化の強い影響を受けるようになる。しかし、ケルト(語)化された地名はベルギーの南部に限られていることから、ベルギーにおけるケルト(語)化は主に南部で起こり、北部では貴族階級にしか及んでいなかった。紀元前2世紀にいくつかのゲルマン部族がベルギーの北部に侵入し、原住民と共存するに至った。ゲルマンの貴族は原住民の貴族と同様にケルト文化の強い影響を受けた。カエサルが侵略した時期のベルギーは、基層言語を話す原住民、主に南部に居住しているケルト部族、そして主に北部に居住しているゲルマン部族の混合地域であった。

以上、本稿で考察してきたように、フランク人の植民はベルギー北部におけるゲルマン語化を促進した¹²⁾。西ヨーロッパにおけるゲルマン語とロマンス語との間の言語境界線は、中世初期にはモントレウ(Montreux)からアーヘン(Aachen)までライン川と平行している。しかし、アーヘンからベルギーに入ると、言語境界線は西方へと方角を変え、フランス北部まで進む。この部分の言語境界線は、ローマ帝国時代後期のケルン・バヴェ・ブローニユを結ぶ防衛線とほぼ一致している。ゲルマン民族大移動の際に形成された言語境界線の位置、すなわちゲルマン(語)化の範囲を調べるには、GysselingやVan Durmeの地名学的研究成果を再分析する必要がある。さらに、ベルギー北部・フランス北部のゲルマン(語)化は複雑なプロセスであり、フランク語的要素のみに限定されているわけではない。例えば、西北ドイツのホルシュタイン(現在のSchleswig-Holstein)にその基盤を持っていたサクソン人(Saxon)もゲルマン(語)化に影響を及ぼした。364年頃

にサクソン人がイギリスへ略奪遠征を行ったことがローマのテキストで報告されている。さらに368年にはガリアにも海から侵略している。373年にはディーゼン(Diesen, 北ブラーバント州)でローマ軍がサクソン人を破っている。また、ローマ人ヒエロニムス(Hieronymus)の記録によると、ゲルマン民族大移動の際にも、サクソン人がガリアに侵入している。アングロ・サクソン人(Anglo-Saxon)は5世紀半ばにイギリスを征服し、ベルギー北部・フランス北部にも渡り、その沿岸地域に定住するようになった。この地域におけるサクソン人の定住状況は -inga-tuna という接尾語をもつ地名の存在をもとに確認されている。この -inga-tuna 地名はブローニュ周辺に集中しているため、サクソン人はこの港から内陸に侵入したのではないかと考えられる。ブローニュ周辺に位置する Landrethun (1155-58年・1215年写本 Landringetun) は -inga-tuna 地名の代表的な例である。この地名はゲルマン語の *landaharingatuna 「ランダハーリの人々の農家」に由来する。tuna が inga を含まない単独の形で用いられている例として Béhune (1056年・1775年写本 Betunia) という地名がある。Béhune は *bi-tuna-ja という三つの語からなる複合語で、「垣根のところにある集落」という意味を表わす。内陸部に入ると -inga-tuna 地名の数は著しく減少し、ブローニュ以東に散在している。このうち最も東に位置している tuna 地名は Warneton/Waasten (1007年・11世紀写本 uuarasthun, ゲルマン語 *Warinas-tuna 「ワーリンの農家」より由来) である。Van Durme によると、サクソン人が沿岸地域に定住したことから生じたフランク語とサクソン語との接触の結果、フランク語はオランダ語へと発展する際にサクソン語から次のような影響を受けている¹³⁾。

例証：[音声面] フランク語の au がこの地方でオランダ語の o ではなく a に発展したことが地名に現われる (例：Adinkerke)。

〔形態面〕 オランダ語の複数形はもともと -en を語幹に付けることで形成されたが、中世期から多くの名詞の複数形には英語と同じく -s をつけるようになる。

以上の地名学的情報は、フランス北部沿岸地域およびスヘルデ川流域でサクソンの特徴を持つ土器・武器・装飾品が発掘されているという考古学的調査における事実によっても裏付けられる。

注

- 1) 五十嵐 (2001:95-104)
- 2) 連邦国家のこの三分割の問題により、1968年以降どの政府も皆倒れた。主な原因はたいていブリュッセルにあり、また、ブリュッセルの肥大による、複雑化がもたらした。国民同盟 (Volksunie) を先頭とするフランデレン人は、いわゆる2言語使用のブリュッセルがフランデレンとワロンと対等の地位を得ることに反対しようとしている。もしそうになったら、人口比で言えば3対2であるのに、オランダ語圏1対フランス語圏2ということになって、自分たちの対等性が失われると彼らは感じているからである。それに加えて、ブリュッセルの住民は、ブリュッセルの郊外に住んでいるすべてのフランス語話者の完全な言語上の権利を求めているのである。1978年以来、フランデレン人とワロン人の間で、ブリュッセルが新しい連邦国家の中で有すべき地位についての論争は行き詰まっている。一方、フランドル人とワロン人の行政上・文化上の自治は実行に移されている (ただし、フランデレン人は、彼らの領域の真っ直中にあるブリュッセルから手を離す気はない)。連邦国家を十分に機能させるためには妥協がみられなくてはならないであろう。ベルギーは統一国家のままであっても、おそらく常に言語上の摩擦はベルギーの生きた現実となるであろう。フランデレン人とワロン人は、学校ですべて他方の言語を学んできたにもかかわらず、実際はたいていワロン人がオランダ

語を話すより、フランデレン人がフランス語を上手に話すという状況であった—これは社会的・経済的な力関係の結果である—そして、当然のことながらワロン人がオランダ語を学ぶ要望と必要性とは最小限のことなのであった。今日では、両言語が必修科目なのであるが、若い学生たちは、彼らの同胞の言語を学ぶ代わりに英語を選択することがかなり一般的である。また、英語はすでにNATOやECの重要な言語としてブリュッセルでは特別な扱いを受けている。この事態は、将来、フランデレン人とワロン人とが、おそらく英語でお互いに話す方がより好ましいと思うような段階に発展するかもしれない (Donaldson 1999:55-56)。

- 3) カール大帝の帝国は多民族国家であり、ヨーロッパの中の多様性を認めていた。例えば、カール大帝は異教徒であるザクセン人とあれほど激しく戦い、ザクセン人を力づくでキリスト教に改宗させようとした。しかしながら、宗教以外のことに関しては彼らの慣習を尊重した (五十嵐 2001:9-14)
- 4) 当時、文化的にも経済的にも優勢になったフランス(語)の支配に対して、フランデレン人側から起こされた初めての反乱が「黄金拍車 (Gouden Sporen) の戦い」(1302年)である。
- 5) 今日ではそのような区分が実際に存在したかどうか疑問もたれている (Donaldson 1999:202)。
- 6) 出崎 (1977:68)
- 7) 最後の2例は、フランス語・オランダ語・ドイツ語の三重語である。また、二重語としては現存していないものには次のような例がある。Paris=Persa (891年頃), Amiens=Embenum (884年)。
- 8) このような問題に関しては、例えばP. v. Polenz, *Geschichte der deutschen Sprache* (Sammlung Göschen 2206), S. 5-86に簡潔な解説がある。
- 9) 基層言語に由来する地名の中には、もとの形とゲルマン(語)化された形とが並存するものもあった。例えば、*Kamulinionという基層言語にその起源をもつ地名として、ゲルマン(語)化した形 Hamblain のほかにゲルマン語の影響がみられない形 Camblin の両方が並行して用いられた。この地名はカムロス (Camulos) という神の名に由来している。この神の名は*Kamulionという地名 (現在 Kemmel) にも現われる。

- 10) 一方、考古学的形跡はもっぱらケルト文化の特徴を示している。
- 11) De Mulder & Van Durme (1996).
- 12) 考古学的観点からベルギー北部のゲルマン(語)化を考察すると次のようになるであろう。フランク人はトンヘレン地区のダイスブルフを本拠地にして、南方に領土を拡大した。クローディオはカンブレを征服すると、そこに王宮を移転した。また、クローヴィスはパリに移る前に、父キルドリックが埋葬されたドールニックを本拠地としている。このようにフランク人の中心地はリンブルフから西フランドル、北フランスへと次第に西方へ移っていった。考古学的調査によれば、リンブルフ州および北ブラーバント州におけるフランク人の集落の多くは450年から500年の間一時的に居住が中断している。王宮の移転に伴って多くのフランク人が移住していったと考えられる。考古学者ロゲ(Marc Rogge)はベルギー北西部およびフランス北部におけるメロヴィング王朝時代の居住跡および共同墓地の所在地をまとめた。考古学的調査の精粗は地域によって異なり、全体像を把握するには不完全なところがあるとは言え、地名学的情報と比較する上で有益な情報を提供してくれる。Rogge (1996)によると、フランク人の居住跡はメロヴィング王が王宮を築いたドールニック・カンブレやその周辺の海岸地域に最も集中している。特に北フランスの西部で著しい。西フランドル州については考古学的情報が不足している。それより東の地域は、レイエ川(Leie)・スハレデ川(Schelde)・デンダー川(Dender)流域でも居住跡の密度が高い。フランク人が定住地として肥沃な農地や川の周辺を特に選んだことがわかる。また、居住が一時的に中断したリンブルフ州周辺が再植民されたのは、発掘された6-7世紀のフランク人の共同墓地が示唆するように、メロヴィング王朝後期になってからである。これらの考古学的情報をまとめると、フランク人は指導者とともに西方へ移動し、やがてカンブレ・ドールニック周辺に定住し、そこから川に沿ってベルギー北部を再植民したと推測される。
- 13) 15世紀までフランドルとイギリスとの間に親しい貿易関係が存在したのは、サクソン人が海岸地域に定住していたからである。

文献

- De Mulder, G. & Van Durme, L. : "De taal van de Oude Belgen," in Lamarcq, D. & Rogge, M. (Hg.): *De taalgrens*. 1996.
- 出崎澄男 : 「フランク族とは何か(上)(下)」『白百合女子大学研究紀要』第13/14号(1977/1978)
- Donaldson, B. C. : *Dutch A linguistic history of Holland and Belgium*. Leiden 1983. 『オランダ語誌』(石川光庸、河崎靖訳) 現代書館1999.
- Gysseling, M. : *Toponymisch Woordenboek van Belgie, Nederland, Luxemburg, Noord-Frankrijk en West-Duitsland*. Brussel 1960.
- Gysseling, M. : "Overzicht over de toponymie van Frans-Vlaanderen," in: *Naamkunde* 1 (1969), S. 167-174.
- Gysseling, M. : "De verfransing in Noord-Frankrijk," in: *Naamkunde* 4 (1972), S. 53-69.
- Gysseling, M. : "Germanisering en taalgrens," in: *Algemene geschiedenis der Nederlanden*. Haarlem 1981, S. 100-115.
- 五十嵐修 : 『地上の夢 キリスト教帝国』講談社 2001.
- カエサル (Caesar, G.J.) : 『ガリア戦記』(近山金次訳) 岩波文庫 1964.
- Lamarcq, D. & Rogge, M. : *De taalgrens: van de oude tot de nieuwe Belgen*. Leuven 1996.
- Milis, L. : "Cultuurhistorische en -sociologische overwegingen bij het fenomeen taalgrens," in: *Ons Erfdeel* 1984 S.641-650.
- Polenz, P. v. : *Geschichte der deutschen Sprache*. Berlin & New York 1978.
- Rogge, M. : "De consolidatie," in Lamarcq, D. & Rogge, M. (Hg.): *De taalgrens*. 1996.
- Van Den Daele, M. : *De Frans-Nederlandse taalgrens*. Antwerpen 1975.